

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 25 日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520824

研究課題名（和文） マレー・ムスリムのライフスタイルにおける「イスラーム化」に関する
実証的研究研究課題名（英文） An anthropological Study of the “Islamization” in the Lifestyle
of Malay Muslims

研究代表者

多和田 裕司（TAWADA HIROSHI）

大阪市立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：00253625

研究成果の概要（和文）：本研究においては、マレー・ムスリムのライフスタイルに焦点をおくことで、「イスラーム化」が、宗教教義的な実践だけではなくハラルな食品やイスラーム風音楽等のイスラーム的な商品の消費という点においても観察されること、さらには、経済的要因などの非イスラーム的な要因によっても加速されていることが実証された。それによって、現代消費社会におけるイスラームの特色があきらかにされた。

研究成果の概要（英文）：This study, based on the empirical research on the lifestyle of Malay Muslims, reveals that the development of “Islamization” is observed not only in the Islamic religious practices but also the consumption of the Islamic goods, such as halal food and Islamic music. Furthermore, it also shows that the “Islamization” process is accelerated by non-Islamic factors, especially economic one as well as Islamic factors. These are distinguishing features of Islam in modern consumer society.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：文化人類学

科研費の分科・細目：文化人類学、文化人類学・民俗学

キーワード：マレーシア、イスラーム、東南アジア、地域研究

1. 研究開始当初の背景

研究代表者はこれまでマレーシアのイスラーム社会を対象とし、マレー系ムスリムによるイスラーム実践、イスラームとマレー系アイデンティティ、イスラームと政治過程、イスラーム法制度等について、文化人類学的な実態調査をもとに研究を進めてきた。とくにそれぞれの事象のなかに共通して見ることのできる「イスラーム化」の過程に関心を

寄せ、その研究成果を著書『マレー・イスラームの人類学』（2005）として公表した。ここ数年は、マレー社会全体の「イスラーム化」の中で強調されるようになったイスラーム的な価値が現代社会における「普遍的」な価値とどのように「整合」がはかられ、そして制度化されているか（あるいは「整合」されていないか）について、「棄教」や「多妻婚」に対する取り扱いなどを事例としながらの実証的な研究をおこなってきた。

本研究は、現代社会におけるイスラームの(再)定式化に関する実証的研究という点で研究代表者の従来の研究をさらに発展させるものである。本研究ではとくに、「普通の」ムスリムのライフスタイルに着目することで、これまでの研究で抽出された「イスラーム化」が受容、定着、拡大する過程を具体的にあとづけることが試みられる。「イスラーム化」については従来、政策、法制度、社会運動などの局面において数多く論じられてきたが、その一方で、グローバル化した大衆消費社会を謳歌する「普通の」ムスリムの「イスラーム化」についてはほとんど注目されることはなかった。

これらの人々はイスラームから離れる方向に向かっているのではなく、各人のスタンスで現代社会のなかでのイスラームの実現をはかっている。たとえば、イスラームの食物タブーは食物の生産過程や外食産業において商品化され、商品としてのハラール・フードなるものを生み出した。女性の身体を覆うという規範はイスラーム・ファッションという形でイスラーム圏をグローバルに横断している。神の恩寵を讃える歌ですら、ポップスやロックの曲と並んでヒットチャートにランクされる。これらの現象の広がりにはムスリムのイスラームにたいする意識の変化を示すものであると同時に、現代社会に特有の「イスラーム化」の有り様を端的にあらわしている。社会変容としての「イスラーム化」を十全に理解するためには、このような「普通の」ムスリムの日常における「イスラーム化」にも注意が向けられることが肝要である。

2. 研究の目的

1980年代以降、マレーシアでは「イスラーム化」と名付けることができるようなイスラームの理念への指向性が高まっている。これは個々のムスリムによる宗教的実践から政府の政策にいたるまでの広範囲に広がる文化的、社会的な変化でもある。本研究は、ムスリムのライフスタイルの変化や日常生活での文化の消費動向に焦点をあてることで、グローバル化、ポスト資本主義、大衆消費社会などを特徴とする現代社会における「イスラーム化」現象をより十全に理解することを目指すものである。

本研究においては、まず基礎作業として、マレーシアのムスリムのライフスタイルや日常生活で観察される「イスラーム化」の諸相を資料として収集する。対象となる領域は、衣食住をはじめ趣味や娯楽など多岐にわたるが、その際、これまであまり注目されてこなかったイスラームが文化として消費される局面に焦点をあてる。

次にこの作業と平行しながら特定の領域

および文化要素を取り上げ、現代社会における「イスラーム化」の広がりという観点から詳細に検討する。そのさい、ハラール・フード、イスラーム・ファッション、イスラーム・インテリア等を主たる対象とする。食、ファッション、インテリアデザインは、イスラーム圏、非イスラーム圏を問わず、現代において文化の商品化がもっとも顕著に表れる領域であると思われるからである。それぞれについて、イスラームが商品化されている度合いを質、量の両面からとらえるとともに、生産、流通、消費の各過程におけるマクロな動向についてもデータを収集する。

最後に、これらの資料をもとにライフスタイルにおける「イスラーム化」を、これまで申請者が検討してきたマレーシアの「イスラーム化」全般のなかに位置づける。

3. 研究の方法

本研究においては、研究期間の各年度に共通して、文献その他の資料収集、クアラルンプール（およびマレーシア以外の地域）での実態調査、資料ならびに調査結果の整理・分析という三段階の方法によって研究をおこなった。

具体的には各年度を大きく3期にわけて、研究を進めた。

第1期は4月から7月までの期間であり、東南アジア都市中間層における文化の商品化や消費動向を対象とする先行研究を収集し、本研究の理論的枠組みをより精緻なものにするとともに、申請者がこれまで積み重ねてきたマレーシアの「イスラーム化」についての研究を、ライフスタイルや消費における「イスラーム化」という観点からいまいちど精査した。なお先行研究の収集にあたってはマレーシアやイスラームを対象とするものにかぎらず、なるべく広範に同種の研究傾向について網羅的な整理、収集を試みた。2年目以降については前年度の研究の総括をふまえながら上記作業をこの時期に進めた。また、当該年度の海外調査にむけての計画、準備作業もこの期間におこなった。

第2期は8月から9月までの期間であり、この期間に1ヶ月程度の海外での資料収集ならびに実態調査を実施した。具体的には、マレーシア・クアラルンプール調査に3週間程度、比較のためにマレーシア以外の地域での調査に1週間程度をあてた。比較対照のための地域としては、マレーシアという地の利を生かすことができ、かつ都市中間層が数多く存在する都市ということから、バンコクとシンガポールを対象とした。平成21年度はクアラルンプールとバンコク、平成22年度はクアラルンプールとシンガポールでの調査を実施した。なお平成23年度については4

月から9月まで本務校よりサバティカル休暇を取得することができたため、約5ヶ月間クアランプールに滞在し、第1期の作業と第2期の調査とを同時並行的に進めた。また平成23年度はバンコク、シンガポール両都市で調査をおこなった。

海外調査としては、3カ年に共通して、(1) 大学、図書館、関連機関等での文献等資料の収集、(2) 関係者への聞き取り、(3) 文化人類学的な実態調査をおこなった。

(1) 文献等資料については、近年のマレー・ムスリムのライフスタイルにおけるイスラームの占める位置をあきらかにすることができるような資料の網羅的な収集を試みた。ライフスタイルや消費動向が対象であるので、いわゆる「文献」資料のみにとどまるのではなく、写真や映像などのヴィジュアル資料、ファッション誌、タウン情報誌などの非学術的資料も含めて、資料収集をおこなった。

(2) 関係者への聞き取り調査については、イスラーム的商品の製造、流通、販売、広告等に従事する企業や消費者団体を対象とし、ライフスタイルにおける「イスラーム化」の進行に対する意識、見解、関与等についての聞き取りをおこなった。

(3) 文化人類学的な実態調査については、イスラームの商品がどのように受け取られ、日常の生活に取り入れられているかについて、現状と変化というふたつの観点から、主に参与観察法を通して把握することを試みた。

(4) 比較対象都市においては、それぞれの都市中間層のライフスタイルにおける宗教の消費のされ方について概観的に把握することで、今後の比較研究のための基礎的資料を入手した。

第3期は海外での資料収集終了後年度末までの時期であり、持ち帰った資料の分析と、当該年度における活動の総括として、年度ごとに研究論文を作成するとともに、次年度への課題の整理をおこなった。

4. 研究成果

本研究によって得られた成果は次の通りである。

第一に、マレーシアにおけるムスリムの宗教実践が、狭義の宗教行動によるだけではなく、より広い、一見すると宗教とは関係がないようにすら見える行動としてもおこなわれていることが実証されたことである。たとえばムスリム女性のファッションとしての衣服、イスラーム的ポピュラー音楽、コーランの章句を刻んだ装飾品など、消費社会における商品の消費という形を通してイスラームが実践されている。マレー系ムスリムによ

るこのようなイスラームの消費＝実践にたいする意味づけや評価は個人の間で微妙な差異があるが、しかし少なくともイスラームの実践であるという認識を有しているという点においては共通している。もちろんこれらの実践を礼拝や断食など、宗教教義的な実践と同列にとらえることはできない。しかし、あきらかにムスリムはイスラームの実践としてこのような消費をおこなっているであり、その意味で、これらの商品についての消費の拡大を「イスラーム化」の進展の一形態としてとらえることは可能である。この点については本研究実施前にある程度予想されたことではあるが、マレーシアでの調査を通じて、あらためて確認することができた。このような宗教実践のあり方は、マレーシアのイスラームにかぎらず、グローバル化した消費社会に適合的な宗教実践としてとらえることができよう。

第二点は、うえに挙げたイスラームの消費＝実践のメカニズムを、マレーシアのマレー系ムスリムのライフスタイルをもとに詳細に析出したことである。マレー系ムスリムのライフスタイルにおける「イスラーム化」は、具体的には以下の3点にまとめることができる。(1) マレーシアにおいてイスラームの消費＝実践が増加してきたのは経済成長が進んだ1980年代になってからであり、しかもそれはマレー系優遇政策（ブミプトラ政策）とともに出現したマレー系中間層の間で顕著である。マレー系中間層がいわゆるイスラーム復興運動の担い手であったという指摘は数多くなされてきたが、彼らは消費においてもイスラームを指向していた。(2) イスラームの消費＝実践にさいしては、マレー系ムスリムはつねに「正しい」とされるイスラームのコードに則ってそれを実践している。たとえばイスラーム由来の装飾品を飾るさいにそれをどのように飾るべきか、あるいはラマダン月に催されるビュッフエ・ラマダンでどのように振る舞うべきか等について、たんなる趣味趣向とは次元を異にするような、イスラーム解釈に基づいた一定の規則性が観察される。(3) イスラームの消費＝実践においても、現代社会における消費行動一般とおなじく、消費を通してアイデンティティの確認や他者との差異化などが実現されている。イスラームの消費＝実践は、一方でそれがイスラームの実践であるがゆえに多宗教・多民族社会におけるアイデンティティの指標となり、他方でそれが消費であるがゆえに他のマレー系ムスリムにたいする階層的な指標となるという、二重の差異化作用を有している。

研究成果の三点目は、イスラームの消費＝実践の具体例としてハラール商品やハラール認証制度について着目することで、消費社

会における「イスラーム化」はイスラームやムスリムのみによってもたらされるものではなく、非イスラーム的な要因や非ムスリムの行動などが関与していることをあきらかにしたことである。すなわち(1)消費社会の拡大は、商品の生産、流通、消費(販売)のすべての工程を複雑化した。それによりイスラーム教義が定めるハラールの遵守は、もはや個人の手を離れ何らかの形での制度化が避けられないものとなっている。イスラームを国家が管理しているマレーシアなどでは公的なハラール認証制度によってハラールの遵守が担保されているが、制度が人々の実践を方向付け、その結果、商品を取りまくシステム全体の「イスラーム化」が進むことになった。(2)システム全体の「イスラーム化」の進展とともに、イスラームを「利用する」者もまた増大していく。ハラール・ハブ化を目指すマレーシア政府や国内外のムスリム客を見込んでハラール認証を得る非ムスリム事業者など、制度化されたハラール遵守はイスラームの領域を越え出たところへと拡散し、かつその領域からの影響にさらされる。たとえば非ムスリムによる経済的理由に基づく行動ですら、ハラール認証制度を介することで社会全体の「イスラーム化」に結びついているのである。(3)消費社会におけるイスラームの消費=実践はローカルな文脈と深く結びつくことで成り立っている。上述の通り多民族・多宗教社会であるマレーシアの場合、イスラームはマレー系にとってのアイデンティティの中核を構成しているが、それは、たとえばハラール認証を有するレストランの選択といった日常生活のなかで構築、更新され続けている。とくにこの点はムスリムが少数派であるシンガポールやタイにおいて顕著である。もちろんローカルな文脈におけるこのような些細なイスラームの消費=実践もまたシステム全体の「イスラーム化」を支えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3件)

①多和田裕司、イスラームと消費社会：現代マレーシアにおけるハラール認証、人文研究、査読有、63巻、2012、69-85、

②多和田裕司、消費されるイスラーム：現代マレーシアにおけるイスラームと消費文化、人文研究、査読有、62巻、2011、93-108、

③多和田裕司、マレーシア・イスラームにおける「イスラーム」と「世俗」、人文研究、

査読有、61巻、2010、145-161、

6. 研究組織

(1)研究代表者

多和田 裕司 (TAWADA HIROSHI)
大阪市立大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：00253625

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし